

ヒト各種肝胆道系疾患および経カテーテル性肝動脈塞栓術施行例における肝内胆管周囲毛細血管叢の病理組織学的検討

著者	小林 聡
著者別名	Kobayashi, Satoshi
雑誌名	博士学位論文要旨 論文内容の要旨および論文審査結果の要旨 / 金沢大学大学院医学研究科
巻	平成7年7月
ページ	1
発行年	1995-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/15224

学位授与番号	医博甲第1127号		
学位授与年月日	平成6年3月25日		
氏名	小林 聡		
学位論文題目	ヒト各種肝胆道系疾患および経カテーテル性肝動脈塞栓術施行例における肝内胆管周囲毛細血管叢の病理組織学的検討		
論文審査委員	主査	教授	高島 力
	副査	教授	中沼安二
		教授	中西功夫

内容の要旨及び審査の結果の要旨

肝内胆管系は肝動脈に由来する胆管周囲毛細血管叢 (peribiliary capillary plexus, PBP) で栄養されており、PBPは肝内胆管系の生理、病態に深く関与していると思われる。しかし、PBPと肝内胆管系の関連性に関する詳細な検討はヒトではなされていない。

本研究では、ヒト正常肝および各種肝胆道系疾患（肝硬変12例、肝内結石症18例、肝外胆管閉塞症12例、原発性胆汁性肝硬変20例、原発性硬化性胆管炎6例）と経カテーテル性肝動脈塞栓術 (transcatheter arterial embolization, TAE) 施行肝細胞癌33例の剖検肝、外科切除肝、生検肝を対象に、病理組織学的染色と脈管内皮染色を併用し、組織学的にPBPの変化を観察し、以下の結論を得た。

1. 正常肝では、PBPは、大型胆管で、内層、中間層、外層の3層構造を呈した。また、やや小型の隔壁胆管では内、外層からなる2層構造を呈した。
2. 肝内胆管に病変の主座を有する疾患についてPBPの観察を行ったところ、PBPの変化は大きく4型、すなわち、炎症型、肝硬変型、脈管減少型、正常型に分類できた。
3. TAE施行肝細胞癌症例におけるPBPの障害程度を半定量的評価を行い対照群と比較したところ、TAE施行肝細胞癌症例でPBPの有意な減少、消失が認められた。
4. 120例の肝硬変合併肝細胞癌剖検症例中、胆管壊死は7例 (5.8%) に認められた。TAE施行例では有意に胆管壊死が多く観察された。しかし、TAE施行症例のうち胆管壊死陽性例と陰性例の間でPBPの減少程度を半定量的スコアで比較したところ有意差は認められなかった。
5. TAE施行症例において非癌部グリソン鞘内の組織像を観察したところ肝動脈枝、胆管枝を中心に種々の程度に内皮や壁の変化が観察されたが、これらの組織学的変化の半定量的スコアと、PBPの減少程度やTAE施行回数の多寡との間には有意な相関関係を示さなかった。

以上、PBPはヒトの各種胆道系疾患で肝胆道病変と関連して種々の病的像を示すことが明らかとなった。そして特にTAEは肝動脈枝を選択的に障害するので、TAE施行例ではPBP内層が高度に減少し、これが胆管壊死やピローマの発生に関与することが示された。これらのことよりPBPは肝内胆道系の生理と病態形成に深く関与することが示唆された。

以上、本研究は肝内胆管系の生理、病態に深く関与していると考えられるPBPの各種肝胆道系疾患での組織学的変化、そしてTAEという治療を行った症例での変化についても新しい知見を得た労作と評価された。